

# 巻 頭 言

## 「透明人間」

宇田川 芳江

タイトルに惹かれて『透明人間』（タバックス）という本を読んだ。このタイトルに反応したのは、難聴である私の体験からである。健聴の複数の人と話す場面で、皆が何を話しているか皆目わからず、その場においても、結局はいないのと同じになり、透明人間になってしまう。中途失聴者・難聴者の生きづらさを説明する市民対象の啓発講座や、大学の手話サークル、要約筆記者養成講習会などで話すとき、透明人間というフレーズを私はよく使ってきた。

この本は「医療的ケア児」の母親である山本美里さんの体験がつつられている。息子さんは、痰の吸引、経管栄養、人工呼吸器管理など医療行為を日常的に必要とする重い障害を持つ。その彼が特別支援学校に入学すると、母である美里さんには週4日の校内待機が必要になった。学校側からは、お母さんは待機室で座っていてくれさえすればいい、必要なこと以外は何もしなくていいと言われた。学校は教育現場であり、子供たちの自立の場であるから、お母さんは必要なとき以外は気配を消してほしいと。山本さんは、自分を「透明人間」と呼ぶ。待機室で毎日座っているだけでも拷問なのに、そのうえ気配を消せとは…。そもそも保護者を長時間付き添わせている時点で、学校は子供たちの自立の場ではないだろう。自分は何か間違ったことを言っているだろうか。山本さんは通信制大学の美術部写真コースで学び、息子さんに常に付き添う自分自身を被写体にして本を出版し、「特別支援学校での校内待機を」「医療ケア児を」など問題化した内容を具体的に社会問題として浮かび上がらせた。

軽い気持ちで手にした本だったが衝撃だった。聞こえない歴が長くなると、聞こえづらさに起因する問題の数々を、涙で訴えるような語りは卒業して、客観的に話すテクニックも身につけてきた。しかし、最近「聞こえないと透明人間になってしまいます」とサラリと終わってはいないだろうか。自分が透明人間になっているときは拷問だった。聞こえない私を前に、見て見ぬふりをしている人の眼も態度も鮮明に記憶に残っている。自分がここにいるのにと、声を大にして叫びたかったそのときの悔しさを私は忘れてはいない。

東京都議会政党各派のヒアリングに行ったとき、議員から補聴器をつければ聞こえるかという発言があった。共生社会とはいうけれど差別も無理解もまだまだある。

社会に向けて、中途失聴者・難聴者が抱える特有の問題を正しく訴えられるのは当事者である私たち以外にない。「私たちは透明人間ではない」と会員一人一人が自分の聞こえづらさを口に出してみよう。それがいつか草の根のように社会に広がっていくように。